



“風化させるな 老人医療費無料化発祥の地”

「いのちの灯」碑前集会開く

老人医療費無料化発祥の地を記念して、全国からの寄付で建立された「いのちの灯（ひ）」の碑前集会が11月24日午後2時から、沢内病院前庭で開かれました。集会は「輝け『いのち』ネットワーク」の主催で、町内外から100人ほどが参加しました。

碑前集会の後、沢内老人福祉センターで交流集会を開き、無料化を実現した故深沢村長の理念を再確認し、「無料化発祥の地とその精神を風化させてはならない」という活気あふれる集会となりました。

ニュースでも若手県内の報道各社は「沢内外し」と表現してその動向を詳細に伝えました。全国的には地方紙がこの問題に注目し、県外紙で確認しただけでも北海道新聞、富山新聞、熊本日日など地方紙15紙が厚労白書に抗議、岩手の町が訂正要求」と報じています。

あけまして
おめでとう
おめでとうございます



今年も「深澤晟雄の会」に、皆様の温かい
ご支援とご指導をお願い申し上げます。

二〇〇八年 元旦

特定非営利活動法人
深澤晟雄の会理事長 太田 祖電
ほか役員 事務局一同

旧沢内村の記述を追加

厚労白書、町の抗議に伝える

厚生労働白書の老人医療費無料化の記述の中で、全国初の無料化を実施した旧沢内村が外されていた問題で、11月21日高橋町長と佐々木議長が厚生労働省を訪れ抗議文を手渡しました。新聞報道などによりますます、町の抗議に対し同省は

「旧沢内村の取り組みは高く評価している。都道府県単位で記述したので決して無視したということではない」とコメントしています。

その後、同省は「白書は誤りではないが、西和賀町の要請に伝えることにした」と、インターネット版の白書で目次のページに「市町村段階まで含めると若手県旧沢内村（現西和賀町）が昭和35年に開始している」という補足を追加しました。

ニュースでも若手県内の報道各社は「沢内外し」と表現してその動向を詳細に伝えました。全国的には地方紙がこの問題に注目し、

深澤語録を訪ねて

「命あつての物ダネ」

昭和40年の年頭にIBCラジオから深澤村長の声が流れた。「政治の中心は生命の尊厳 尊重にある」という言葉を残して1月28日逝去。その43日前の12月16日に収録されたテープが最後の肉声を記録している。

私は民主主義の基本でありますところの人命尊重の考え方を政治の最高最終の目標といたしまして、今後とも住民福祉のため努力をいたしたい所存でございます。ややもいたしますと、現実的な生活の厳しさから「命あつての物ダネ」では

なく、「物ダネあつての命」という風に考えやすいのでありますが、物が命よりも大事だといつづつになりまして、たんでは、これは極めて危険な恐ろしい考え方だと申すほかございません。このすがすがしい希望の躍動する新春に当たりまし

て、皆様と共に改めて政治の中心が生命の尊厳 尊重にあると云うことを再確認したいのでございます。そして、経済開発と共に社会開発という佐藤総理大臣の考え方をさらに一歩進めまして、生命尊重のためにこそ経済開発も社会開発も必要なんだと云う政治原則を再認識すべきであると存するのでございます。

「晟雄の心」と「いのち」を詠う

うた

花巻市 三田 照子（90歳）

村人の命の尊重に要^{かなめ}おく、すべての改革そこに始まる
老人の医療費ゼロといふ村の哀史を知りぬ。「深夜便」にて
（作者はNHKの「ラジオ深夜便」で旧沢内村の歴史を知った）
病院を厭^{いと}ふ者らの家を訪^とひ 命を説きぬ。一つ命を

「長生きはするもんだなあ」と老人は涙ながして喜び合へり
（昭和35年12月、全国に先駆けて老人医療費無料化を実現）
遺曆を知らぬ晟雄の一生とて 近代医療を村に啓^{ひら}きぬ

（昭和40年1月28日村人の命を守って深澤晟雄逝去、享年59歳）

録余集編

「最高裁まで争って
もいい」と言い切った
深澤晟雄だったら
何と言っただろうと
思う厚生労働白書の
「沢内外し」 西和

賀町の抗議に厚生労働省は、白書のインターネット版で「無料化は旧沢内村が昭和35年に開始」と補足した。白書への抗議も、政府の補足も異例だという
老人医療費無料化は、昭和30年代に豪雪・貧困・多病の三重苦にあえぎながら、村民一丸となって築き上げた住民自治の成果であり、希望に満ちた生命行の門出であった。まさに、その時歴史が動いて「国も後からついて来た」という歴然たる事実は西和賀町民の名誉であり誇りである。白書は政府刊行物だけに記述は正確を期すべきで、補足は今後に生かされなければならぬ。生命行政50年目の節目に「憲法論争辞さず」の深澤精神を蘇らせる迫力で、国への異義申し立てを实らせた。それは西和賀町民に新たな誇りと勇気と希望を与えてやまない。



旧沢内病院の待合室。村内唯一の医療機関で豪雪の冬はなおのこと「村民の命のとりで」であった。
（昭和40年ごろの写真）